

【後期始業式あいさつ】

次に叩くその一回で

校長 渡邊 政 徳

「実は、松岡修造とテニスをしたことがある。」と言うと、たいいていの人驚きます。ウインブルドン大会ベスト8の元プロ選手と、です。種明かしをすると、20年ほど前、ある市の市制施行30周年記念の企画の中で松岡氏を講師としたテニス教室のようなものがあり、応募したところ抽選に当たり参加することができたのでした。練習メニューの中で松岡氏が参加者一人ひとりとストロークでラリーをする場面があり、私も何本か打つことができました。テレビで目にするように、松岡氏は明るく前向きで、私も楽しく教室に参加させていただきました。

さて、この「日本一熱い男」として知られる松岡修造氏ですが、数年前に熱いメッセージを集めた日めくりカレンダーが発売されました。「心を元気にする本気の応援メッセージ」として発売時に人気を博しました。その中の21日のところをめくるとこのようなメッセージが書かれています。

「次に叩くその一回で、その壁は破れるかもしれない」

破るべき「壁」があって、それは100回叩けば破れると言われれば、人は頑張ることができるかもしれませんが、しかし、その回数がわからなければ途中で諦めたくになります。「壁」が微動だにしないように思えるときには、無力感に苛まれます。次に叩く一回で、壁は破れるかもしれないのに。

テニスの試合の中でもラリーが続き、どこにボールを打っても相手が返してきて、ラリーが無限に続くのではないかと思えるときがあります。一体何回打てば、どれだけ我慢すればポイントが取れるのだらうと気が滅入りそうになります。勉強でもそうです。どうやっても解けない問題があったり、いくら頑張っても成績が思い通りに伸びないことがあります。どれだけやればできるようになるのだらうと、理想と現実の間でもがき苦しみます。あとこれくらい頑張れば「壁」は突破できるのだよ、と誰かに言ってもらいたくなります。

しかし、多くの場合どれくらい頑張ればよいのかわかるのは後になってからです。あれだけやったから「壁」を破ることができたのだと納得できるのは「壁」を破った後なのです。だからそこに至るまで、その打破を信じ、自分を信じて努力を続けなければなりません。我慢が必要なのです。もちろん、ただ漫然と取組を続けるのではなく、方法の見直しや工夫なども必要でしょう。また、先人の経験や助言も参考になるでしょう。

先が見えず、もがき苦しみながらも努力している人に伝えたい。君には気付かないかもしれないが、決して動かないように思えた「壁」も、実は少しずつ表面の摩耗や内部の崩壊が進んでいる、と。あともう少しかもしれない。叩け。叩け。君のその一撃が、視野を遮るその大きな壁をきつとぶち破るだらう。頑張れ、鳳鳴生諸君。